

バグース

Bagus!

カンポン テ ラ ガ アイール

Kg Telaga Air



第7回(平成10年度) 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

はじめに

鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

会長 北方 都志信

(青年海外協力隊鹿児島県OB会会長)

鹿児島県青少年国際協力体験事業は今回で7回目となりました。ここに、その報告書「Bagus! Kg Telaga Air (素晴らしきテラガアイル村)」をとりまとめました。

この事業は、青年海外協力隊の活動現場に青少年を派遣し、開発途上国で顔の見える草の根の国際協力を実践している隊員の活動を一緒に体験するとともに、訪問国の人々との交流を通して、国際交流・国際協力に対する理解を深め、国際性豊かな青少年の育成を目的としています。

今回は、鹿児島市、大口市、国分市、始良郡内9町、伊佐郡菱刈町との共催で実施しました。各市町村から推薦された20名(中学生9名、高校生10名、高等専門学校生1名)と同行者5名(内1名がマスコミ)で、平成10年7月26日～8月2日、マレーシアのクアラルンプール、クチン、マラッカを訪問しました。

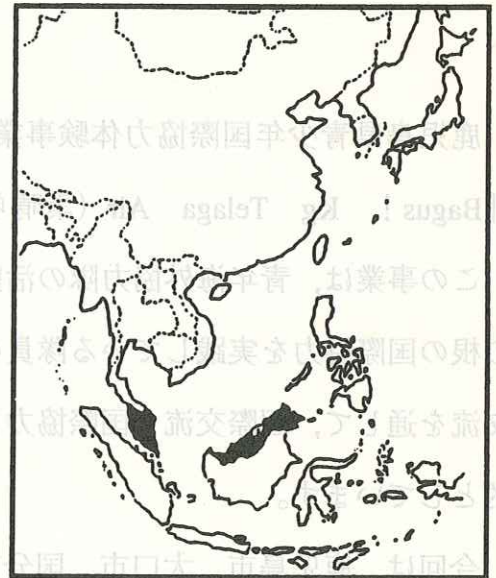
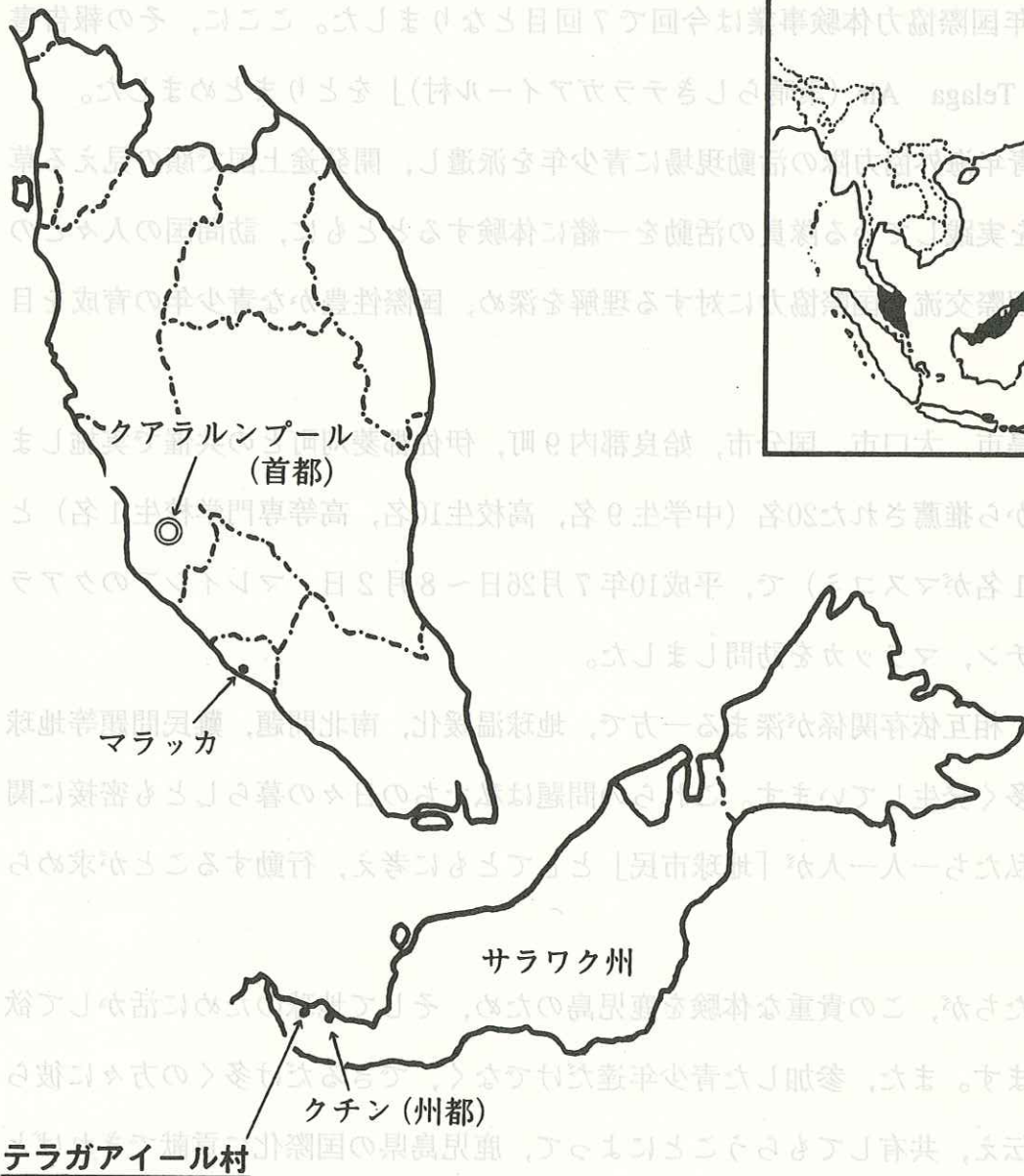
現在の世界は、相互依存関係が深まる一方で、地球温暖化、南北問題、難民問題等地球規模の問題が数多く発生しています。これらの問題は私たちの日々の暮らしとも密接に関わっています。私たち一人一人が「地球市民」としてともに考え、行動することが求められています。

今回の参加者たちが、この貴重な体験を鹿児島のため、そして地球のために活かして欲しいと願っています。また、参加した青少年達だけでなく、できるだけ多くの方々に彼らの新鮮な感動を伝え、共有してもらうことによって、鹿児島県の国際化に貢献できればと考えております。

最後に、この事業にご協力を賜りました多くの皆様に心より感謝申し上げます。

マレーシア略図

(委員会日O果島民衆朝代副代編平青)



テラガアイール村

目 次

◆ はじめに	鹿兒島県青少年国際協力体験事業実行委員会 会長 北方 都志信	
◆ マレーシア略図		
◆ ごあいさつ	鹿兒島県総務部国際交流課長 片平 芳美	1
◆ 事業概要	事業趣旨, 事業主体 訪問団員名簿 訪問日程	2
◆ 団員報告		13
「初めての海外」	前岡 圭太	10
「青少年国際協力体験事業を終えて」	吉村 佳奈	11
「青少年国際協力体験事業」	牧田 瑛樹	12
「マレーシアを通して」	中原 麻理	13
「わたしの財産」	北村 由貴	14
「マレーシアでの体験を通して」	和田 ありさ	15
「マレーシアを通して」	畑 中ルミ	16
「少し大人の階段を登った私」	坂元 佑佳	17
「マレーシアでの体験で学んだこと」	野村 育代	18
「マレーシアでの体験を通して」	国生 亜由美	19
「マレーシアでの八日間」	猪目 香	20
「異文化に触れて」	安藤 容未	21
「マレーシアを訪ねて」	田口 裕子	22
「青少年国際協力体験事業に参加して」	永山 雅幸	23
「青年海外協力隊活動現場から」	二渡 和笑	24
「たくさんの笑顔と出会って」	海江田 彩	25
「トゥリマ カシ マレーシア」	山内 千花	26
「青少年国際協力体験事業を通して」	井手上 直樹	27
「貴重な八日間」	赤石 直子	28
「協力隊の活動を見て」	富永 克弘	29
◆ 国際協力体験事業を終えて	訪問団団長 窪田 義次	30
◆ テラガアイール村ホームステイ先配置図		31
◆ 事業関連の新聞記事等		33
◆ 事業関連のスナップ写真		36
◆ 同行者一口メモ		43

ごあいさつ

鹿児島県総務部国際交流課長

片平芳美

平成10年度「鹿児島県青少年国際協力体験事業」の御成功を心からお喜び申し上げます。

21世紀を担う青少年を海外へ派遣し、若い純粋な目と心で世界を見すえ、肌で感じることは、これからの国際社会に適応できる人材を育成する上で、非常に効果的な方法であります。また、海外に出て、新たな目で日本の現状や将来のことを考える良い機会でもあります。

この事業は、今回で第7回目ですが、本県の青少年派遣事業の先駆的な事業として高く評価されています。今回は、マレーシアを訪問し、開発途上国の新しい国づくりのために活動している青年海外協力隊の活動現場を訪問したり、農村でのホームステイや小学校での共同作業への参加など、地元の人たちとの交流によって異文化を体験し、国際交流や国際協力に対する理解を深めることができたことと思います。

参加された皆様の御報告をお聞きますと、純真な気持ちや溢れる情熱で、言語、生活様式、習慣、文化の壁を乗り越えることができる積極的で国際性豊かな青少年が、着実に育っていることを実感いたします。今後、この貴重な経験をこれからの人生に活かしていただけるものと思っております。

鹿児島県は、現在、青年海外協力隊の支援、海外技術研修生等の受け入れ、青少年の海外派遣、香港、シンガポール及び韓国全羅北道との交流会議の開催や中国江蘇省との交流など様々な事業を実施しており、「アジアを中心にした世界に開かれた南の交流拠点」を目指し、様々な交流を積極的に推進してまいります。

最後に、この事業を実施された鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会及びこの事業の実施に当たり御支援・御協力をいただいた国際協力事業団並びに青年海外協力隊の皆さんに心から敬意を表しますとともに、この事業の今後一層の充実、御発展を祈念いたします。

- 13 千 香 口 田
- 22 幸 野 山 永
- 34 笑 味 新 二
- 38 津 田 玉 新
- 39 藤 千 肉 山
- 43 樽 南 土 毛 共
- 48 千 直 石 赤
- 49 山 京 永 富
- 50 大 森 田 富 晃 田 岡 廣
- 51 國 獨 頭 式 ト マ ス ム ー ホ 林 ル ー ト マ マ
- 52 華 専 協 関 津 の 藍 関 業 専
- 53 真 智 ヲ セ ス の 藍 関 業 専
- 54 子 入 口 一 善 行 同

事業概要

表25 (平並青) 員同問誌

事業の趣旨	鹿児島県青少年を開發途上国に派遣し、その国づくりに貢献している青年海外協力隊員の活動現場の体験や現地での協力活動を行うことで、国際協力に対する理解を深めるとともにホームステイや学校、施設などでの交流を通して相互理解を深め、国際性豊かな人材を育成する。また、派遣後は、これらの体験を報告会などを通して学校や地元に戻し地域レベルでの国際化に寄与するものとする。
事業主体	鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会 《構成団体》 青年海外協力隊鹿児島県OB会 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会 (財)鹿児島県国際交流協会
主催	鹿児島市、大口市、国分市、菱刈町、始良町、蒲生町、溝辺町、横川町、栗野町、吉松町、牧園町、隼人町、福山町
協賛	(財)古謝育英会
後援	国際協力事業団九州国際センター、鹿児島県、鹿児島県教育委員会
協力	マレーシア大使館、マレーシア航空

表26 (香行同) 員同問誌

機関	(現島事務) 会謝謝交情国県島児鹿 会平海外協力隊島県OB会	大森田 善 平野 朗 吉
	(員並員) 会謝謝交情国県島児鹿 会平海外協力隊島県OB会	山本 共 隆
	会謝謝交情国県島児鹿	崎 健 吉
	会謝謝交情国県島児鹿	山 本 共 隆

訪問団員名簿

訪問団員（青少年）20名

氏名	学校名	学年	推薦自治体	備考
前岡圭太	鹿児島玉龍高等学校	2	鹿児島市	
吉村佳奈	鹿児島玉龍高等学校	2	〃	
牧田瑛樹	鹿児島商業高等学校	2	〃	
中原麻里	大口高等学校	2	大口市	
北村由貴	国分南中学校	1	国分市(国分市国際交流協会)	
和田ありさ	国分高等学校	2	〃	
畑中ルミ	大口高等学校	2	菱刈町	
坂元佑佳	重富中学校	2	始良町	
野村育代	蒲生中学校	3	蒲生町	
国生亜由美	加治木高等学校	2	溝辺町	
猪目香	鳳凰高等学校	2	〃	
安藤容未	鹿児島城西高等学校	3	〃	
田口裕子	牧園高等学校	3	横川町	
永山雅幸	栗野中学校	1	栗野町	勤共
二渡和笑	鹿児島工業高等専門学校	4	吉松町	
海江田彩	牧園中学校	2	牧園町	
山内千花	隼人中学校	3	隼人町	賛
井手上直樹	日当山中学校	3	〃	
赤石直子	福山中学校	3	福山町	賛
富永克弘	牧之原中学校	1	〃	

訪問団員（同行者）5名

氏名	所属	備考
窪田義次	(財)鹿児島県国際交流協会(事務局長)	団長
宮蘭夏美	青年海外協力隊鹿児島県OB会	
酒井マリ	JICA九州国際センター(国際協力推進員) 鹿児島県青年海外協力隊を支援する会	
宮崎剛	(財)鹿児島県国際交流協会	
大城哲也	KTS鹿児島テレビ放送	

訪問日程

平成10年7月26日～8月2日（7泊8日）

7月26日（日） 結団式（鹿児島空港国内線3FホールA）

- ・ 激励（鹿児島県国際交流課長補佐 鮫島敏明）
- ・ 団員あいさつ（二渡和笑，前岡圭太）

鹿児島空港発（福岡空港経由）

家族の見守る中，期待と不安を胸にマレーシアへ出発。

事前研修時のテキストに目を通し，マレーシア語の復

習をしている団員もいた。

新クアラルンプール空港到着

約5時間のフライトの後，オープンしたばかりの新クア

ラルンプール空港へ到着。広くて豪華な作りである。預

けた荷物が出てくるのに時間がかかった。

（ホテル宿泊）



7月27日（月） 「国際協力事業団マレーシア事務所」表敬訪問

レクチャー

・国際協力、マレーシア諸事情（西牧隆壯所長）

・青年海外協力隊員の活動状況（佐藤映二次長）

新クアラルンプール空港発

クチン空港到着

テラガアイール村到着

歓迎あいさつ

ガフォール氏（サラワク州地区担当責任者）

ラムリー氏（テラガアイール村責任者）

ホストファミリーとの対面式

20名の生徒、同行者5名はそれぞれのホストファミリーと対面。名前が一人ずつ呼ばれ、それぞれ村人の前で握手したり、肩をたたき合ったり、抱き合ったりした。不安と大きな期待を胸に夕暮れの中各家庭へ分かれて行った。

マレーシアネームの命名式（於 村の集会所）

各家庭で夕食を済ませた後、集会所に集まり25名の団員へマレー語の命名式が行われた。マレーシアの著名人の名前が付けられ、ホームステイ期間中村人からその名前と呼ばれることになった。

（ホームステイ）



7月28日（火） 「隊員活動現場—SMSクチン中高等学校」訪問・交流

- ・SMSクチン中高等学校生徒との文化交流会
- ・遠藤奈津子隊員（日本語教師）の活動現場視察

文化交流会では、サラワクの民族舞踊、ドラエモンの合唱の披露などがあり、団員たちは日本舞踊、おはら節の踊りを披露した。日本語を習っている生徒と日本語を使ってゲーム形式でコミュニケーションを深めた。お互い住所交換し親睦を深めた。遠藤隊員から「日本のことをよく学び、足元を固めてから海外に出てきた方がよい」などの国際協力についてのアドバイスをうけた。

テラガアイール村の概要説明

- ・村の発展状況等（ラムリー氏）

テラガアイール村は1981年入植。当時は電気、道路などなし。1987年車の通れる道完成。人口は年々増加している。現在、人口1800人。戸数236戸。テラガアイールの意味は“井戸水”であり、村内に枯れない井戸がある。村内のエビの養殖場を見学し、養殖事業が軌道に乗っている様子を見た。エビは日本に輸出している。

（ホームステイ）



7月29日 (水) マレーシア料理体験 (於 村の集会所) (火) 日82月7

村人といっしょにマレーシアの伝統料理に挑戦。

森野敬英博活の (聯地浦本日) 員瀬千朝余藤藤

テラガアイル村内の小学校にてボランティア活動

村内の小学校にて、小学生とともに校庭柵のペンキ塗りや花壇に土を入れたりして汗を流した。また5年前に鹿児島からの派遣団がこの小学校の校庭の一角に植えた木々を確認した。当時30本植え6本が育っていた。

村の広場にて植樹

スマラツという3本 (雌雄の別があり雄2本、雌1本) の植物を海に見える村の広場に植えた。大きく育って欲しいとの気持ちを込め根本の土をかためたり水をやったりした。

文化交流会 (村の集会所)

フェアウェルパーティーを兼ねた交流会。サラワク伝統舞踊、音楽の披露の後、団員たちは日本舞踊、合唱、風船芸そして習字の披露、弓道の演武などを行い交流を深めた。団員も村人もいっしょになってマレーシアの踊りを踊るなど、交流会は夜更けまで続いた。

(トマスムーホ)

(ホームステイ)



7月30日（木） 「隊員活動現場—サラワク州社会福祉局老人ホーム」訪問・交流

- ・江頭典子隊員（看護婦）の活動現場視察
- ・施設入所の老人の人たちとの文化交流会

江頭隊員と院長の案内で施設を見学。老人1人1人に温かく声をかけ、テキパキと動きまわる江頭隊員の姿に感動。日本舞踊や合唱により施設入所の老人の人たちと交流をした。

ワイルドライフセンター見学（サラワク州の施設）

- ・ボルネオ島の自然動物についてのレクチャー
- ・保護されているオラウータンなど見学

ボルネオ島の豊かな自然について理解を深める目的で同センターを訪問しました。オラウータンなどの希少動物を見学し、自然保護、環境の問題について理解を深めた。

クチン市内見学

テラガアイール村の人々とクチン市内のレストランで食事をした。

（ホームステイ）



旅交 7月31日(金) 日本人 テラガアイール村お別れセレモニー 員類 (木) 日03月7

テラガアイール村長のあいさつや記念品の交換があった。団員数名
がテラガアイール村での感想を披露し、4泊5日のホームステイを
締めくくった。それぞれのホストファミリーと別れを惜しみテラガ
アイール村を後にした。新クアラルンプール空港発

(ホテル宿泊)

8月1日(土) マラッカ視察 (※1999年は、ザビエル鹿児島上陸450周年にあたります)

セントポール教会、サンチャゴ砦、マラッカ海峡などの
新クアラルンプール空港着

(ホテル宿泊)

8月2日(日) 新クアラルンプール空港発

福岡経由鹿児島空港着

市内バス

(バスツアー)



初めての海外

奈 掛 林 吉
(手島高等学校 高3)

前 岡 圭 太
(玉龍高等学校 2年)



今回の「青少年国際協力体験事業」には、青年海外協力隊の活動やマレーシアの文化に興味を持ち自分の希望で参加した。

事前研修でマレー語の勉強を受けたとはいえ、自己紹介が精一杯の状態では、ホストファミリーとのコミュニケーションが一番不安だった。ホームステイ先では、自分の思ったことをうまく伝えることができず、手振りと身振りでコミュニケーションを取った。うまい具合に会話は進まなかったけど、自分の気持ちを一生懸命に察してくれた家族と、「何とか理解したい、伝えたい」としている自分との間で不思議と「心」だけは、しっかりと伝え合うことができた。

お箸を使わずに手で食事をしたり、布をまとってマンディという水浴びをしたりと、マレーシアの生活習慣は、独特なものだった。でも、それらの習慣は思っていたより自然な形で受け入れられた。

4日間のホストファミリーとの生活は、あっという間に過ぎていった。いよいよお別れの時、イブ(母)の作ってくれたマレー料理、日本語を覚えようと必死だったパパ(父)、そして、折り紙やシャ

ボン玉、風船などをしていろいろ遊んだ「アジザ」と「マジア」。別れが、こんなにつらいものになるとは思わなかった。涙が次から次にあふれて止まらなかった。

「TUAH」これがマレーシアでの自分の名前だ。呼びやすく覚えやすくて気に入った。村での歓迎のレセプションの様子が現地の新聞に大きく掲載されて、一生の記念になった。

クチンの中高等学校では、協力隊の活動を見ることができたり日本語を習っている生徒と交流することができた。ウォークマンや写真、地図などを使って会話をした。僕は、マレーシアで、多くの人と出会い、そして貴重な体験をした。

「JICA(国際協力事業団)」の視察や青年海外協力隊の仕事を体験する中で、その事業の多様さと、職種の多さに驚いた。それに、多くの日本人が海外で貢献していることも、今回初めて知った。「何か一つでも専門的に勉強していけば、自分も近い将来、外国で役に立てることがあるかもしれない。」そんな気がしている。今年は、アメリカに修学旅行に行くことになる。東南アジアとアメリカを同じ年に楽しむことができるのはラッキーだ。マレーシアは、とてもすばらしい国だった。日本とアメリカ、マレーシアを対比して見た時にどんな感想が残るのか楽しみだ。

僕は今回の事業を通して、自分の視野の狭さをつくづく感じた。もっともっと大きな目で世界を見てみたい。そして、一生懸命勉強して、いつかまた今回一緒に行ったメンバーとマレーシアに行きたい。

青少年国際協力体験事業を終えて

吉村佳奈

吉村佳奈

(玉龍高等学校2年)

太圭岡前

(平野高等学校高麗王)



私がこの国際協力体験事業に参加した目的はまず第一にマレーシア語を学びたかったからというものだった。しかし、実際訪問を終えた今は、それ以上に得たものが大きかった一週間だったと思う。青年海外協力隊なんて自分とは全くかけはなれた存在だと思っていた以前の考えは大きく変わった。友人に、看護婦として青年海外協力隊に参加したいといっている人がいるが、今は正直すごいと思う。実際に二人の協力隊員の話聴き、自分の意思で日本から遠く離れたマレーシアにやって来て、日々努力している姿を見て、それまで全く興味のなかった青年海外協力隊に興味を持つようになったことは、大きな収穫である。私の夢はツアーコンダクターになることだが、青年海外協力隊というもう一つの夢ができた。この二つの夢に向かって努力していきたいと思う。

そして他に得た大切なもの、それは新しい友達と もう一つの家族である。この事業に参加しなかったであろう貴重な出会いが数えきれない程あった。行動を共にした団員の皆、事前研修の時から私達団員の面倒を見てくださった関係者の方々、クアラルンプール、クチンでのバスのガイドさん運転手

さん、テラガアイル村でのホームステイの時に話をした村人、ホストファミリー、訪問した学校の生徒たち、青年海外協力隊員の2人、JICAの方々などあげればきりがなくたくさんの人々と出会えた。その中でも共に行動した団員との友情は大切にしたいと思うし、ホストファミリーにはいつかまた絶対に会いにいこうつもりだ。

ホームステイ中は、生活観の違いをはじめ全く言葉が通じなかったことや食事の回数の多さに戸惑いが隠せなかったが、ホストファミリーの暖かい歓迎の気持ちを感じることができたし、何よりそれがこの国の生活なのだ、何事も日本と比較していた自分が間違いなのだ気付くことができた。国にはその国それぞれの生活習慣があり、その生活習慣に囲まれた環境が存在するのはその国の人にとってあたり前の事なのだ。そして、自国のものではない生活習慣にふれることができたのは、言葉にできない程貴重な体験だったと思う。

窪田団長がこうおっしゃっていた。

「外国に住むことはできても、外国でホームステイすることはなかなかできないからねえ。」

そういわれる程貴重な体験ができた高校2年生の夏を私は絶対に忘れることはないと思う。

青少年国際協力体験事業

里 瀬 泉 中
(中 2 科 学 専 攻 高 口 大)

牧 田 瑛 樹

(鹿児島商業高等学校2年)



私は、7月26日から8月2日まで、「青少年国際協力体験事業」に参加し、マレーシアを訪れました。

今回の事業の目的として、テラガアイル村でのホームステイや、青年海外協力隊員の活動視察があり、結団式の時、これからの未知の体験に、大きな不安が募るばかりでした。

さて私がこの事業に参加した大きな理由は、異文化を体験してみたいと思ったからです。

まずホームステイで感じた、現地の文化が日本と違いすぎているのに驚きました。よくテレビで見た事のある、右手での食事。あの光景をそのまま体験した時に、手での食事は汚いという感覚よりも、あまりにも日本と違った食事風景に、感激し、興奮しました。またあまり、上手く手で食べられない私に、ホストファミリーの人達が、親切に食べ方を教えてくれたのには、また感激しました。

しかし、感激しているだけではなかったのに気付いたのは、風呂とトイレの時でした。風呂は、日本みたいにバスタブやシャワーも無く、マンディと呼ばれる、水浴びでした。トイレも、用をたした後は、バケツに溜めた水を流すだけのもので、先進国、日本で贅沢に慣れきっている、私にとって、きついま

のがありました。しかし、その事は、現地の人達にとってごく当たり前であって、一般的な事なんだろうと改めて思いました。

そして、テラガアイル村にホームステイをしている間、青年海外協力隊員の活動視察があり、日本語教師の遠藤隊員、看護婦の江頭隊員の活動現場を訪れ、遠藤隊員の学校では、熱烈な歓迎を受け、現地の中学生と、友達になり、お互い写真を撮り合ったり、住所を教え合ったりして、交流を深めました。また、遠藤隊員に、マレーシアでの苦労などを尋ねてみると、やはり、言葉や習慣に苦労したそうです。

次に江頭隊員の活動している、老人ホームでは、施設内を見学したり、マレーシアでの医療問題や、福祉について質問をしたりしました。私は、以前から福祉の事に、関心を持っていたので、江頭隊員に、日本とマレーシアの老人ホーム施設の違いについて尋ねてみると、日本と違ってマレーシアの老人ホームには、マレーシアの国籍があれば、誰でも、無料で入る事が出来るそうです。それに、マレーシアには、老人の一人暮らしが少なく、日本で問題になっている核家族というのは、極端に少ないそうです。

今回、この事業で、青年海外協力隊員の苦労や、異文化の体験で多くの事を学ぶ事が出来ました。将来、この経験を生かし、日本だけでなく世界にも目を向けていこう、と思います。

この事業に参加した多くの仲間や、マレーシアの人々に心から感謝します。

Terima Kasih

(有難う)

わたしの財産

北村 由貴

(国分南中学校1年)

北村 由貴

(国分南中学校1年)



今年の夏休み、私はマレーシアへ7泊8日いろんなことを学びに行きました。その中で、最も実り多い体験をした4泊5日のホームステイはすごくよかったです。ホストファミリーはとても優しく、私に気づかせてくれました。

マレーシアはイスラム教なので、宗教でマンディという水浴びをしなくてはいけなくて最初のうちは冷たくて、少し大変だったけど、慣れば何度もマンディをしたくなります。

そして、食事の時はわざわざスプーンをだしてくれてママとパパは右手で食べていました。左手は使ってはいけなくて聞いたので食事の時はひざの上のせていました。私がおどろいたのは、ママは出かける時や帰ってきた時、ねる時は必ず、紅茶を飲ませてくれました。なぜ飲ませるのかわからないけど、これが異文化なのかなと思いました。

ホームステイの中で青年海外協力隊の日本語を教える遠藤隊員と老人ホームで看護婦をしている江頭隊員を訪問しました。遠藤隊員は日本語を教えたくて日本語教師になったそうですが、半年たっても言葉がなかなか通じなくてつらいと聞いて、言葉の壁は厚いかなと思いました。江頭隊員は人の役に立ちた

いとの思いで看護婦になって老人ホームで働いています。責任の重い仕事なので大変そうでしたけど、江頭隊員は大変な事だけど責任感がついたとか自分で考えて判断するようになったなど、たくさんのことを得ることができたと言いました。わたしは2人の隊員を見て、今まで知らなかった青年海外協力隊のことを知りたくなりました。

この事業でわたしが得たものは、2人の隊員の活動を見て、聞いてこの人たちみたいにすばらしい人になりたいと思ったことです。

異文化を肌で感じて、多少のつらいことがあり早く帰りたいと思ったけど、このつらい経験はここでしかできないことだと思うと、たくさんのことを得たような気がします。この経験を通して、海外に目を向けられるようになりました。

協力隊の活動を見て将来海外協力隊になるかは分からないけれど、この事業で人のがんばる姿を見てわたしも将来一生懸命がんばって人の役に立つようなことをしたいと思いました。

最後に、この事業に参加できたことに心から感謝しています。おかげでお金にかえることのできない貴重な財産を得ることができました。

マレーシアの体験を通して

貴 由 林 洋

(甲 I 経済学中南谷国)

和 田 ありさ

(国分高等学校2年)



作文、面接そしてマレーシア行きの切符を手にした私は胸を弾ませて、期待と希望で一杯でした。マレーシアへの出発当日、何でもチャレンジしてやると思う気持ちと不安でとまどい、日本を離れて初めての海外旅行ということもあって、ドキドキでした。マレーシアに着き、一番最初に思ったのは本当に発展途上国の国なのかなあとの思いでした。街は、高層ビルが立ち並び、人々の行き来が多い中で私は、何か一つ足りない物に気がきました。それは、よく目にする緑がないのです。JICAに行った時に、分かったことは、街では人々が年々増加する中で、自然は減り、地方は、今だに自然は残っているが、一部分で行き届いてない点があるということとJICAの活動内容が、人材・福祉への取り組みと技術・環境分野への協力だと知ったことです。マレーシアは、日本を見習っているようで、2020年には、先進国の仲間入りをしたいという強い願望があるということに、びっくりしました。私は、今でも十分に先進国の仲間入りをしてもいいような感じがしました。

私は、異文化・言葉の違いにとまどいました。ホー

ムステイでは、ホストファミリーの人とのコミュニケーションが全くといっていいほどに、取れなくて不安で悲しくなる思いをしたけど、毎日夜になると私の部屋に、ホストファミリーのお母さんがきて、英語もあまり話せないのに、少し英語を交えて身振り手振りで一生懸命コミュニケーションをとってくれたことに感動しました。食事も右手を使って食べる難しさ、水浴びのマンディは心臓がバクバクして冷たくて、毎日5回しないとイケないのに夜1回しかしなくて色々な面で迷惑をかけてしまいました。私のことをとても良く理解してくれ、家族の一員として接してくれたことを誇りに思うと同時に感謝で一杯です。

青年海外協力隊の2人の隊員と会うことができました。日本語教師と看護婦の人でした。2人の隊員が協力隊を通して得たことは2人とも似ていて、異文化の違いに驚いたこと、またそれを学べたこと、責任のある重要な仕事に就き、自分自身に責任感がついたことだそうです。私はこのマレーシアに行こうと思ったのは、将来保母になりたいと思っているからです。日本以外の子供の様子を実際見たり、ふれ合う機会を持って、マレーシアの子供は純粋で人懐こくて、心の温かい子供ばかりでした。日本の子供は、おもちゃとかで遊んだりするけど、マレーシアの子供は何でも自分達で遊びを創ることに喜びを感じて、すごい想像力だなあと圧倒されました。

マレーシアを通して、新しい自分を見つけられたような気がします。口で言い表せないくらいいい体験をしました。Terima Kasih

マレーシアを通して

対談 対談

(手と対学中富重)

畑 中 ル ミ

(大口高等学校2年)



私は、今回青少年国際協力体験事業に参加し本当にいろいろ学び感じ取るものが多かったように思います。国際協力に興味はあったもののほとんどが無知識だった私が、この事業を通し、青年海外協力隊のことなど、現地で実際活動している協力隊の話を知ったり、マレーシアのJICA事務所を訪れ、協力隊の本来の目的、活動内容、職種など詳しく学び取ることができました。JICAの役割は、開発途上国の国造りを担う人材育成に力を貸し、“人”を通じて技術を有効に移転させ、現地の人達の手による国の開発を支援することであることが分かりました。またその“人”にあたるのが協力隊であるということも分かりました。その中でも実際協力隊として活動している方達の話はとても貴重なものでした。その中で日本以外の文化や生活習慣など受け入れようとする気持ちが必要であるという話があり、私もそのことはテラガアイール村に滞在して本当にそのように感じました。異国での協力活動を行う上では、その国での生活を強いられるのは、あたり前のこととなり文化や生活習慣をも受け入れようとする寛大な気持ちが必要だと思いました。手を直接使い食事を取ることや、1日5回のお祈り、女性が肌

を隠すことなど、イスラム教と密接に関係している異文化に触れて、とても驚きました。その他にもマンディと呼ばれる行水を1日3回程実際体験したりし、朝夕などとても冷たかったことを鮮明に思い出します。でもやはり一番苦労したのは言葉でした。勉強し覚えていたつもりがふいに出てこなかったりして、コミュニケーションを取ろうとしている相手のことがうまく理解できず、残念に思ったこともありました。でもいろいろな人達と出会いと関わりの中で自分が得たものは、言い表せない程です。やさしく親切に接してくれた村の方々、そして私のホストファミリー。^(ありがとう) トウリマカシを言った後に返ってくるほほえみなど、とにかく人間の根底にある温かさが、そこには溢れていたように思います。マレーシアは今、日本やその他の国々の援助を受けたりしながら2020年に先進国の仲間入りをしようとしています。来るべき21世紀を迎えても他国の援助を必要とする国があると思います。私の将来はまだはっきりとしたものではありませんが、世界に目を向けられる様になった今、私の中にたくさんの夢が見つかったような気がします。そしてこれからも一つでも多くの国のことや宗教・文化・習慣など、自分なりに勉強してみたいと思います。今回、この事業に参加し、同じ様に興味を持った友達と出会うことができたことを本当に幸せに思います。

出会いや、体験は、形として残る物ではないけれど、これから私の人生の大きな大きな支えとなることだと思います。最後に実行委員会及び自治体の皆様、このような貴重な経験をさせていただいたことに深くお礼申し上げます。

マレーシアでの体験を通して

外 育 林 理

(平 8 対 学 中 主 筆)

国 生 亜 由 美

(加 治 木 高 等 学 校 2 年)



今回のマレーシアでの体験研修で、私は様々なことを学び、考えさせられました。そして、ホームステイを通して貴重な体験をすることができました。最初に、ホームステイを通して感じたことは、村の人達の生活がとてものんびりしているということでした。また、道を歩いていると、手を振ってくれたり、村の人がみな身内のように親しく話している光景は、私の心をとても温かくしてくれるものでした。これは村でしか味わえない体験だと思います。しかし、ホームステイ先での生活は、慣れないことばかりでした。ご飯は、右手でつかんで食べ、水浴び、トイレの使い方にもとまどってばかりでした。しかし、ホストファミリーの人達に温かく迎えられ、親切にしてもらったおかげで、言葉や宗教、生活習慣も違う環境を楽しむことができました。そして、つたない会話の中で私が改めて感じたことは、言葉や宗教が違ってても、一緒に笑うだけで通じ合える、私達は同じ人間だということでした。マレーシアに着いた、次の日に訪れた JICA マレーシア事務所では、日本がどのような協力を行っているかを知ることができました。私が思っていた以上に、様々な面で協力が行われていることを知りました。また、

実際に、青年海外協力隊員である、遠藤さんと江頭さんを訪れることによって、その現場を見ることができました。遠藤さんは、中高等学校で日本語を、江頭さんは、老人ホームで看護婦の活動をされていました。2人とも、とても生き生きと活動されていました。そして、私が一番印象に残ったことは、老人ホームの施設でのことでした。老人ホームには、色々な方がいました。同様に、その宗教もそれぞれでした。そして、施設もイスラム教徒が入る部屋と、キリスト教徒、仏教徒などの信者の人達が入る部屋がありました。「イスラム教は厳しい宗教なので、他の宗教の人達とのいざこざはよくあります。でも、それは互いに我慢し合っていますが。」という、江頭さんの話を聞いた時、世界のあちこちで起こっている紛争もこんないざこざから起こってしまうのかなと、とても身近に感じました。

今回、マレーシアに行って初めて日本が私の知らない所で様々な協力をしていて、日本は手本とされている先進国のうちの一つだということが分かりました。また、マレーシアは現在、発展途上国から先進国へと変わろうとしていることも分かりました。そして、今回の体験を通して初めて、宗教間の問題を身近に感じる事ができました。また、その解決が複雑で、困難であるということと同時に、私がホームステイで感じたように、やはり人間は皆同じで、心は通じ合えるのではないかということのを合わせて、深く考えさせられました。

マレーシアでの8日間

朱 容 勲 定

(宇 8 対 平 泰 高 西 親 島 聖 理)

猪 目 香

(鳳凰高等学校2年)



私達20名は、引率者5人と共に8日間をマレーシアで過ごしました。この事業の目的は、青年海外協力隊員の活動現場を見学し国際協力について理解を深め、そしてホームステイを通して異文化を体験することでした。日本とは違った、イスラム教を信仰する家庭に初めてホームステイすることになったのですが、風習や生活習慣が異なることはもちろん、言葉さえまともに伝えることができないままその家庭に入ることはすごく不安でした。それでも英語やジェスチャーを混じえながら多少は会話もできました。そんな中で「食事は右手のみを使って食べる」「1日に何度も『マンディ』と言う水浴びをしてお祈りの前に身体を清める」などイスラム独自の生活を送ってきました。家族の方もすごく親切で、私の伝えようとしていることにも一生懸命応えようとしてくれて、「マレー語をちゃんと勉強してくれば良かった」と申し訳なく思うくらいでした。ホームステイ中は青年海外協力隊として派遣されている日本語教師の遠藤さんと、看護婦の江頭さんの活動現場へも見学に行きました。特に、私は幼い頃から海外で医療活動をするのが夢だったので、看護婦の江頭さんにはとても関心があり色々なことを聞きまし

た。話をしていると江頭さんは生き生きとしていて、自分が今やっていることに自信をもっているというイメージを受け、「私も早く海外で医療活動ができるようになりたい、そして江頭さんのように自信を持って生きていきたい」と将来の夢に胸を膨らませる思いでした。それから、日本語教師の遠藤さんはSMSKという中高等学校で活動しています。遠藤さんは「マレーシアの子供達は日本の子供と比べて純粹です」と言っていました。私もホームステイした村に初めて入った時そう思いました。それは子供たちの笑顔が何とも言えない素晴らしいものだったからです。そんな子供達とふれ合うのはすごく新鮮で、童心にかえったようにとても純粹な気持ちになりました。マレーシアという国は開発している所としていない所の差が激しく、私達がホームステイした村はまだ開発が遅れている所でしたが村の人々はとても温かい人達ばかりでした。言葉がうまく通じなくてもどかしいことも少なからずありましたが、本当にこの村での4日間は素晴らしい思い出となりました。またいつか私が大人になった時は、もっとマレー語を勉強してきてこの村へやって来たいと思います。マレーシアで過ごした8日間は、青年海外協力隊の活動現場の見学や、イスラム文化を体験し、異国のの人々とふれ合い、とても素晴らしい体験になりました。何を学んだのかはよく分かりませんが、言葉では言い表せない何かを確かに学んだ気がします。

異文化に触れて

香 目 漱

(中 2 対 学 等 高 風 属)

安 藤 容 未

(鹿兒島城西高等学校 3 年)



私は、青年海外協力隊について、中学生の頃から関心を持っており、今回、マレーシアへ行けるチャンスを得ました。またこの研修は、国際協力体験に加え、国際交流も含まれています。言葉、食事、風呂など日本と全てが違うというマレーシアへ行きました。まず、この事業の最大の目標である、現地での青年海外協力隊員として活動している2人の方を訪問しました。日本語教師の遠藤さんと看護婦・介護者指導の江頭さんを訪ねました。2人は、それぞれ言葉には困ると言っていました。彼女らが持っている素晴らしい笑顔ではね返しているという気がしました。「1日1日、起こることが新鮮だ」と話す顔はとても輝いて見えました。「マレーシア」それは、発展途上国ということで、私は少し見下げた心を持っていました。しかし、それは大きな間違いでした。この国は、2020年には先進国の仲間入りをしようと必死だということを知りました。大きな工事が次々と進められているなど、国が向上するため、国全体が必死なのだそうです。また、マレーシアという国は、多民族国家のため、お互いが認めあって生活していることも知りました。

ところで、今心に一番残っているのは、テラガアイール村での4日間のホームステイでした。初めは、コミュニケーションがうまくとれず、「相手は何を考えているのだろう」とか「どうしたらよいのだろう」などと動揺ばかりでした。しかし、私は分かって欲しいと強く願い、必死になって知っている単語を使い積極的に話しかけるようにしました。そうしたら、ホストファミリーの方も分かるかと一生懸命になってくれました。いつも、「お腹はすいていないか。」や「マンディ(水浴び)したら。」とかとても気を遣ってくれました。日本とは全く違う風呂、食事、トイレ、衣装、もちろん言葉などまるで違う生活でしたが、そのような温かいホストファミリーのおかげで一つ一つが私に驚きと喜びを与えてくれ、本当に楽しいホームステイとなりました。ホストファミリーとの出会いは一生忘れることのない思い出になりました。また、マレーシアという国に触れて、日本が、どれだけ私たちの暮らしが便利なものであるか、使い捨てが激しいかを考えさせられました。これからの日本の生活の中で、物の大切さをよく考え、そして、人との出会いを大切にしていきたいと思いました。終わりにこのようなチャンスを与えてくださった方々に本当に心から感謝しています。ありがとうございました。

マレーシアを訪れて

幸 藤 山 水

(中1女子中学生)

田 口 裕 子

(牧園高等学校3年)



私は、この事業に参加して物事に対する考え方や視野が広がったと思います。この体験は一生忘れることの出来ない思い出となるでしょう。

今回、2人の青年海外協力隊員を訪問しました。1人目の方は、日本語教師をしている遠藤奈津子さん。マレーシアでは、中学と高校が一緒になっているそうです。日本との一番の相違は、先生に対して生徒は絶対服従の所だと思いました。

2人目の方は、看護婦をしている江頭典子さん。私は江頭さんに、ここに来て一番大事なことを質問しました。

「やはり言葉もそうですが、日本では全て指示に従っていたのにここでは私が指示する立場です。最初は、すごく戸惑いました。でもみんなが自分に頼って来るので、今では責任感もつき、自信が持てるようになりました。」と言われました。2人の隊員に共通して言えることは、自分の仕事に自信と誇りをもっている所だと思いました。

7月27日から7月31日まで、テラガアール村にホームステイをしました。食事をする時右手を使い、素手で食べました。私は、左ききなので大変難しかったです。でも、一番苦労したのはお風呂でした。日

本では、個室で素っ裸になり体を洗います。ここでは、マンディサロンという布を身にまとい水を浴びます。私の家のマンディ場所は、外にありました。サロンが幾度となく落ちそうになるのをこらえながら必死で体を洗います。水なので、夜は風が吹くと震えてしまうぐらい寒いでした。貴重な体験だったと思います。

私は今回、自分の勉強不足を改めて痛感しました。知識の面でもそうでしたが、相手の話している言葉が理解できず困りました。何とかジェスチャーで通じ合いましたが、もっと勉強しておけばよかったと何度となく思いました。私は、マレーシアの人達からいろいろなことを学び、いろいろなものを貰いました。私の夢は、そのお返しに今度は私が日本語を教えることです。

「言葉は世界の架橋」

私の大好きな国の一つとなったマレーシアと私の母国日本の架橋となるお手伝いが出来たら素敵だなと思います。このような機会を与えてくださった方々、全ての人に感謝しています。貴重な体験をさせていただきまして本当にありがとうございました。

青少年国際協力体験事業に参加して

千 谷 口 田

(平島対学養高園遊)

永 山 雅 幸

(栗野中学校1年)



7月27日からマレーシアのボルネオ島サラワク州クチン市の近くのテラガアイール村に4泊ホームステイすることになりました。目的はマレーシアで活動している青年海外協力体の隊員の活動内容を知ることとマレーシア文化を体験することです。

今回ぼくたちは、日本語教師の遠藤さんのいる学校と看護婦の江頭さんのいる老人ホームを訪問しました。遠藤さんの学校では、中学校2年生の人たちとマレーシア・日本のお互いの国の文化の違いや特徴を質問をし合って交流しました。江頭さんの老人ホームでは『上を向いて歩こう』や『となりのトトロ』など日本の歌を歌ったりおじいさんおばあさんたちは、マレーシアの歌を歌って交流しました。

ぼくたちが、テラガアイール村につくと村の人たちがたくさん集まって楽器を演奏して大歓迎してくれました。そこでそれぞれホストファミリーと対面してそれぞれの家へ別れました。ぼくのファミリーは、祖母・父母兄3人姉2人妹2人の10人家族でした。ぼくは、マレーシア語はできないけど家族みんなでぼくのためにやさしく日本語とマレーシア語でわかりやすくいろいろなことを話したり説明したりしてくれました。ぼくは、テキストを見ながら話し

ました。

ご飯を食べるとき右手を使う食べ方を習いました。日本のご飯と違ってパサパサしていてつかむと指のすき間からこぼれて上手に食べることができませんでした。次のご飯を出されたときはスプーンを用意してくれました。マレーシアのご飯は、焼魚とホーレン草のような野菜の入ったスープがいつも出されました。スープにはトウガラシが、1本まるごと入れてあってとても辛いでした。

「マンディ」と言う水あびを毎日3回ぐらいしました。事前研修のときに、サロンと言う布を使うと習っていましたが、ぼくの家族は、バスタオルを使っていました。着いた日に、長兄にマンディのやり方を教えてもらいました。バスタオルの着け方はむずかしいでしたがようやくできるようになりました。まず、直径5,60センチ深さ30センチぐらいのたらいに水をいっぱい溜めてその水を手桶で汲んで身体に掛けながら洗います。初めのころは、水も冷たく感じてむずかしいでしたが2,3日もしたら上手になりました。サロンを土産に買って帰りました。

サラワク州は、森が深く多くの生き物が、住んでいますが開発が奥地まで進んでオラウータンなどは、絶滅のおそれがあり保護センターで保護していると言う話を聞いてぼくもそのような活動に参加したいと思いました。今回この研修に参加させていただき、たくさんの人々との出会い、友達ができたり貴重な体験をさせていただきありがとうございました。言葉など勉強してまた訪問したいと思います。

青年海外協力隊活動現場から

二 渡 和 笑

(鹿児島工業高等専門学校4年)



7月26日。私は初めて海外へ旅立ちました。短期間で学んだマレーシア語は果たして役に立つのか、数えきれない程の不安で頭はいっぱいでした。その反面、胸は好奇心や期待で踊っているようでした。初めてマレーシアという外国の地に足を踏み入れた時、

「よしっ!!今日から7日間、全てが勉強だ。がんばるぞ。」

と、自分に言い聞かせました。

最初に訪問した所は、「JICAマレーシア事務所」で、マレーシア事情の説明の後、青年海外協力隊として現在活動中の日本の隊員の紹介がありました。47名の隊員達は、日本語教育や建築、システムエンジニア、パッケージデザインや昆虫学といった一味違った協力もしていて少しびっくりしました。

ホームステイ先のテラガアイール村に到着すると、予想もしていなかった盛大な歓迎をうけ、とても感激しました。

7月28日。まずクチン中高等学校の日本語教師として活動している「遠藤奈津子」隊員を訪ねました。日本語を勉強している生徒達が「ドラえもん」の歌を歌ってくれた時はとってもびっくりしました。一緒に写真を撮ったりと、学校での交流はとても楽し

いでした。

7月30日。老人ホームの看護婦として活動している「江頭典子」隊員を訪ねました。日本でいう老人ホームとは違って、基本的に全員が健康体で生活しているようです。ただ老人だけに、江頭隊員が看護婦として活躍しているのです。27名のスタッフが、リハビリや料理、作業療法や遠足など、老人達が健康で楽しめるように、工夫をしているようでした。

日本から遠く離れた国、日本人はたった一人という場所で、遠藤、江頭隊員は強くたくましく活動していました。2人の活動を見て周囲の期待に応えるために、一生懸命がんばっているんだなあと十分に感じる事ができました。私も一生懸命勉強して、一生に一度は青年海外協力隊として、自分の持っている技術を提供しつつ、現地で色んな事を学びたいと、強く思いました。

今回、ホームステイでお世話になったテラガアイール村では、マレーシアの文化や伝統、生活習慣に触れることができ、村での生活は大変貴重な体験でした。言葉は通じなかったけど、子供から老人まで笑顔で声をかけたり、気を使ってくれたりして、村人達の心の温かさを感じました。

この8日間で、私はたくさんの事を学びました。その中で一番は「人の温かさ」です。私は日本人として、マレーシア人の温かさを大いに感じました。私達にとって大事なものは、いずれは国境を越え、他国の温かさを感じ、感じられるようになることだと思います。

最後に、御指導して下さった方々、両親に対し心から感謝しています。日本では味わえない貴重な体験をすることができ、ありがとうございました。

たくさんの笑顔と出会って

笑 味 鄭 二

(中ト対学門専善高業工島民鹿)

海江田 彩

(牧園中学校2年)



7月26日に鹿児島空港で結団式を行い、青少年国際協力体験事業の団員として、7泊8日の日程でマレーシアへ出発しました。

マレーシアという国がどんなところなのかよく知らないで来てしまった私は、首都であるクアラルンプールの夜景がとてもきれいなことに驚きました。私のもっていたイメージは、電気などなくて、夜は真っ暗で、木の家で自然がいっぱいあるところでした。私が想像していたよりもずっと都会的で、高層ビルや世界一を誇るツインタワーなど、そのすごさにびっくりしました。

ホームステイ先のテラガアイル村に着いた時、初めて大丈夫だろうかという不安と言葉が通じるだろうか心配になりました。そして、本当にマレーシアに来たんだなと思いました。4日間の滞在中、村のみんながすごく歓迎してくれて本当にうれしく、今までの不安がふっとんでいく感じでした。

ホストファミリーは、英語が話せる両親と子供達だったので、少しは意志疎通ができて、おもしろい話もたくさんしました。おかげで、私は毎日笑って過ごすことができました。

食事とマンディにはびっくりしました。味は辛いのか甘いかのどちらかです。ホットミルクのコップの

底には砂糖が沈んでいて、スープは口から火が出そうなくらい辛いでしたが、フルーツは本当においしくてたくさん食べました。マンディのときは寒い感じであたたかいお風呂に入りたいとずっと思っていました。ホームステイ3日目、私は家でバドミントンのラケットとシャトルを見つけました。私は部活でバドミントンをやっているのですごくうれしくて「サヤサンガットスカマインバドミントン」(私はバドミントンをするのがとても好きです)と声をあげていました。それまで、ジェスチャーと英語で会話していたので、マレーシア語を使ったのは初めてでした。久しぶりにバドミントンができてすごくうれしかったです。別れのときはすごくつらくて、色々な事を思い出して、こらえていた涙がたくさんたくさん出てきました。バスに乗ってからもポロポロと涙が出て、私は心の中で何度もありがとうをくり返していました。

私は青年海外協力隊の人に会えたことをとてもうれしく思いました。普段あまり考えてもいなかったから、色々話を聞いたときにすごいと思いました。周りはマレーシア語ばかりで大変だろうと思うし、言葉の違いがあっても一生懸命がんばっていることが分かり、心から、がんばってと応援する気持ちになりました。

私には将来先生になりたいという夢があります。海外で日本語を教える協力隊員にもあこがれたりもしました。でも、たとえ夢が夢で終わったとしても協力隊員のように前向きで後悔しないようにがんばっている人になっていたらいいと思います。これから、マレーシアの人達からの最高のプレゼントである「笑顔」を忘れないようにがんばっていきたくて考えています。

山内 千花

(隼人中学校3年)



私は、今、中学3年生。受験生ということで志望校そして進路、将来の夢を聞かれることが多い。その度に戸惑い、はっきりとした答を口に出せずにいた。「外国で人の為になる仕事がしたい。」漠然と描いていた夢は、現実的な日常では、口にすることが気恥ずかしく、その夢の実現の為にどうしていいのかわからないことが、なおさら口にすることを遠ざけていた。

「青年海外協力隊」「国際協力」この文字をマレイシアでの体験研修事業募集の用紙で見た時、「あっ、これだ。」とビビビとくるものがあった。何か見つけられると直感した。

事前研修の度に、期待は不安に変わっていく。言葉は通じるのだろうか。コミュニケーションはとれるだろうか。トイレは？お風呂は？心配はつきない。そんな不安を胸に、初めて私は、飛行機に乗って、初めて日本を離れた。

「どこが発展途上国なのだろう。」クアラルンプールに着いた瞬間、驚きで目を見張った。ビルが立ち並び、車の往来は激しく、活気にあふれている。知識、情報は、なんてあいまいなものだろう。最初から大きなショックを受けた。風が、においが、色が、

音が、日本とは全然違う。その一つ一つを感じる時に、不安はいつしか期待に変わっていき、外国に来たという喜びで胸がいっぱいになった。

ホームステイ、煮沸しなければ飲めない水、水をかぶるだけの入浴、右手だけで食べる食事、快適な生活に慣れている私にとって、困難であるべき習慣は、正直言って、何も苦にならなかった。それは、ホストファミリーの気配り優しさのおかげだと滞在中は思っていたけど、帰って来て今静かに思い出すと、私自身、考えが浅く、短期間という観光客気分楽しんでたからだと気がついた。あの生活がずっと続くと思うと、感じ方は違ってくる。今、気づかせてもらったことで、体験はあの期間で終わったのではなく、これから幾度となく思い出し、また違った感じ方ができるということも知った。

一番関心があった青年海外協力隊の活動視察は、想像してた以上に仕事はかなりハードで大変そうだったが、楽しそうな顔をしていたのが印象的だった。好きな仕事をされているのだなあとまぶしく見えた。

私は国際協力に対し、難しい事は分からないが、お金や高い思想、知識、技術も必要だろうが、人間としての思いやりや一緒にやろうというお互いを理解する気持ちが何よりも大切だと思う。笑顔こそ心をつなぐものだというのもこの体験で学んだ。マレイシアの文化も人も愛しい、それ以上に日本の文化や家族や友人ももっと愛しい。この気持ちを胸に、日本人としてもっと成長し、世界の仲間達と一緒に協力し合って、いつか仕事をしてみたい。

ア トウリマ カシ。ア トウリマ カシ。

青少年国際協力体験事業を通して

井手 直樹

(甲斐高等学校)

井手上 直樹

(日当山中学校3年)



青少年国際協力体験事業の募集を知ったとき、おもしろそうだから行ってみようという軽い気持ちでした。行き先は、マレーシアでした。いざ行ってみると、文化の違いや現地での日本人の活動に驚くとともに大きな関心を持ちました。

まず、驚いたのがホームステイ先で知った生活習慣の違いです。マレーシアでは、日本のお風呂に入るのではなく、マンディという水浴びをします。各家庭によって回数は違いますが、約1～3回が平均でした。風をひいたときも、熱を冷ますためマンディをするそうです。

次に、食生活についてです。マレーシアでは、素手で食事をします。この時使うのは右手だけで左手を使ってはいけません。ただし、右手が食事によって汚れているときに、スプーン等で取り皿に取り分けるときは、左手を使ってもかまいません。最初は、ご飯などを手で掴むのが難しく取りこぼしていましたが、段々と慣れていき上手になりました。

また、服装に関しても文化の違いに驚きました。男性は普段は動きやすく涼しげな服を着用しています。お祭りや祝い事があるときには、民族衣装を着ます。長袖・長ズボンなのですが、とてもすべすべ

した生地できており通気性もよく着心地もとても良かったです。女性も室内にいるときは、普通の動きやすい服を着用しているのですが、外出時は、身体をしっかりと覆う大きな服を着て、頭にはトゥドンと呼ばれるスカーフのようなものを被ります。この服装はイスラム教の人達がしているもので、マレーシアの宗教がよくわかるひとつのものだと思います。

海外で働く人の中に、青年海外協力隊の人達があります。ニュース等で聞いたことはありますが、あまり関心を持ったことはありませんでした。マレーシアでは46名の方が、青年海外協力隊員として活動しています。今回僕達は、老人ホームと中学校で活動している隊員を訪問しました。一番驚いたのは、老人ホームで働くマレーシア人の看護婦のいないことです。何故なのかははっきり理解できませんでした。経済面や生活面でいろいろあるのだろうと思います。

中学校では、生徒に英語と日本語を教えています。日本の中学校では英語を教えているだけなのでとても勉強熱心だと思いました。マレーシアの生徒はとても友好的で、すぐに友達になりました。学校では、他国との交流についても教えており、友好的な人が増えれば、日本や他の国との交流が深まり、技術や経済のますますの発展が望めると思います。

この青少年国際協力体験事業を通して、僕達は自分たちのことだけでなく、他の国の発展のためにも貢献しなければならない必要性を強く感じました。

貴重な8日間

赤石直子

(福山中学校3年)



マレーシアにいたのが2・3日前だったように感じます。実際に、8日間は楽しくて、あっという間に過ぎました。

マレーシアで一番目にぶつかった壁が異文化体験でした。特に食事のとき右手だけをつかうのは、抵抗がありました。いざやってみても、熱いものや、指ですくえないものがあつたりでうまく食べることができなくて3食目からスプーンで食べました。味の方は、問題はなかったと思いましたが、油っこいせいかな後半は少しつらいでした。

マンディ(水浴び)や、サロンの巻き方、民族衣装の着方など、わからなくて、しかも言葉も分からないので泣きたくなったときもありました。でもホストファミリーが根気強く教えてくれたのでうれしかったです。私が日本語を教えると喜んで覚えてくれました。私の意志が通じたときが一番うれしかったです。

国際協力ということでJICA(国際協力事業団)マレーシア事務所と青年海外協力隊員を訪問しました。

JICAでは全体的な協力隊の仕事の内容を聞きました。隊員として派遣されている遠藤隊員と江頭

隊員は、それぞれ自分の持っている技術の仕事で現地の人々のためにがんばっていました。2人とも日本ではできない体験ができるけど言葉や考え方の違いに苦労すると言っていました。言葉の壁の厚さは私もホームステイで実感したのでよくわかりました。

遠藤隊員が私達に、

「海外での生活はいいけれど、日本で自分のまわりのことについて勉強しなさい。そして自分の視点をもちなさい。」

と言ってくれました。私は自分の国について知らないことが多いと感じていたので、その言葉がすごく心に残っています。自分の技術を開発途上国の人々のために役立てるのは大変だと思ったけれど、希望をもって取り組むというのはすごくやりがいのあることだと思います。私は今、何の技術も持っていないけどいつか遠藤隊員や江頭隊員のようにみんなから頼られて自分の技術を発揮できるような人になりたいです。今から、少しずつできることを探そうと思います。

私はこの体験事業に参加することができて本当によかったと思います。自分のことだけを見ていたらいけないということと、協力し合うこと、勇気、たくさんの友達、そしてもう一つの家族を得ることができました。日本ではできない体験もしました。つらいこともあったけどそれ以上の発見やうれしいことがありました。ただ一つ心残りなのはホストファミリーとの会話が続かなかつたことです。だからもっとマレーシア語を勉強してまた会いに行こうと思っています。

この8日間の体験は一生忘れることのできない思い出であり、新たな私のスタート地点です。

協力隊の活動を見て

千直 百 赤

(平8対学中山語)



7月26日から8月2日まで国際協力体験事業で、マレーシアへ行く機会を得た。

8日間は、充実していても、短く感じた。ホームステイして1日目は言葉の面で、いきづまったりしたが、しかしなんとなくジェスチャーで、意味がわかり会話も通じた。

ファミリーは、特にお母さんと話をする機会が多かったが、分からないポーズをすると、分かりやすく僕に絵で、表してくれたりした。初め言葉が通じるか不安だったが、その不安は最初だけでファミリーといっしょに、会話をするのが楽しくてたまらなかった。

ホームステイ先の家族は、みんなで6人でとても明るい家族だった。ホームステイ先での思い出が印象深く残っている。

そして現在、青年海外協力隊で働いている方々の様子を見れたことも、強い感動を僕に与えてくれた。協力隊のことは、教科書にも出てきて少しは知っていた。

僕達が訪問した所は、中高等学校と福祉センター(老人センター)で日本人女性2人が協力隊員として活動していた。

富 永 克 弘

(牧之原中学校1年)

まず、中高等学校の遠藤さんを見てマレーシア語に十分慣れていることに気づいた。

「なにかつらかったことはありませんでしたか。」との質問に

「思うひまがありませんでしたね。」

と答えていた。なんとなく、急げ急げの毎日をおくっているように思えた。福祉センターの江頭さんも同じことを言っていた。江頭さんは、老人の方々の看護のお世話を1人できりまわしていた。

ちょっと変わってるなと思ったのは、この施設は、病気の人を看護する所というより、1人暮らしの老人の方々の自立の為に、手助けしているというかんじだった。

僕も、自分のことだけでなく人の役にたつ人になりたいと、遠藤さんや江頭さんを見て思った。

今、発展途上国で多くの青年海外協力隊員が活躍している。

マレーシアの活動現場を見て青年海外協力隊員の仕事がいかに大切な仕事か分かった。

日本がここまで発展できたのも他の国が支えてくれたからだと思う。このような国際協力を大事にしなければならないと思った。

夏休みの間、貴重な体験をさせてもらってどうもありがとうございました。

国際協力体験事業を終えて

訪問団団長 窪田 義次

今回の国際協力体験事業は、鹿児島市と始良・伊佐地域の3市10町から推薦されました団員20人に同行者5人を加えて実施しました。

訪問国はマレーシアとし、サラワク州クチンのテラガアイール村でホームステイを行うことにしました。

ここは、5年前、第3回にホームステイをしたところであり、村の発展の姿や「鹿児島森」のその後を見ることも一つの楽しみとしてありました。

サラワク州の中心都市クチンからバスで1時間余り行ったところに、大自然に抱かれてテラガアイール村がありました。バスが着くのを待ちかねたように、村民上げての大歓迎を受けました。

村がアレンジしたプログラムに基づき、協力隊員がいる「SMS校」「老人ホーム」の2つの施設の訪問と交流会、村内小学校での花壇の手入れ等、村人たちと一緒にいった「ワイルドライフセンター」やクチン市内の視察、村人との文化交流会、村広場での記念植樹等生涯忘れることのできない思い出ができました。

SMS校で日本語を教えている遠藤隊員と老人ホームで看護の指導に当たっている江頭隊員の2人の活動内容とそこでの生活ぶりを見聞した団員は、隊員の活動に感銘を受け、「技術協力」の意義などに理解を深める一方、自分の考え方をしっかり持つ、責任の重さを知る、物事を深く考える習慣を身に着けることなどをも学びました。また、老人ホームでは、民族・言語・生活習慣・価値観の異なる人たちが一つの施設の中で生活している姿を目の当たりにして、マレーシアが複合民族社会であることが分かったようです。

ホームステイでは、心からのもてなしを受け、人と人との交流が心の財産になることに気づき、また、村の連帯感の素晴らしさを知り、それらを胸に深く刻むことができました。

村は5年前に比べ、人口が倍増し、電気、水道、道路等のインフラが整備され各面で発展していました。「鹿児島森」は、土壌の関係から植樹した果樹は30本が6本になっていました。

帰路、「テラガアイール村にまた行きたいか」との質問に全員が手を高く挙げてくれたことが、青年海外協力隊員の活動現場と異文化を体験することを二つの柱とし、国際性豊かな人材を育成するというこの事業の成果を表しているように思いました。

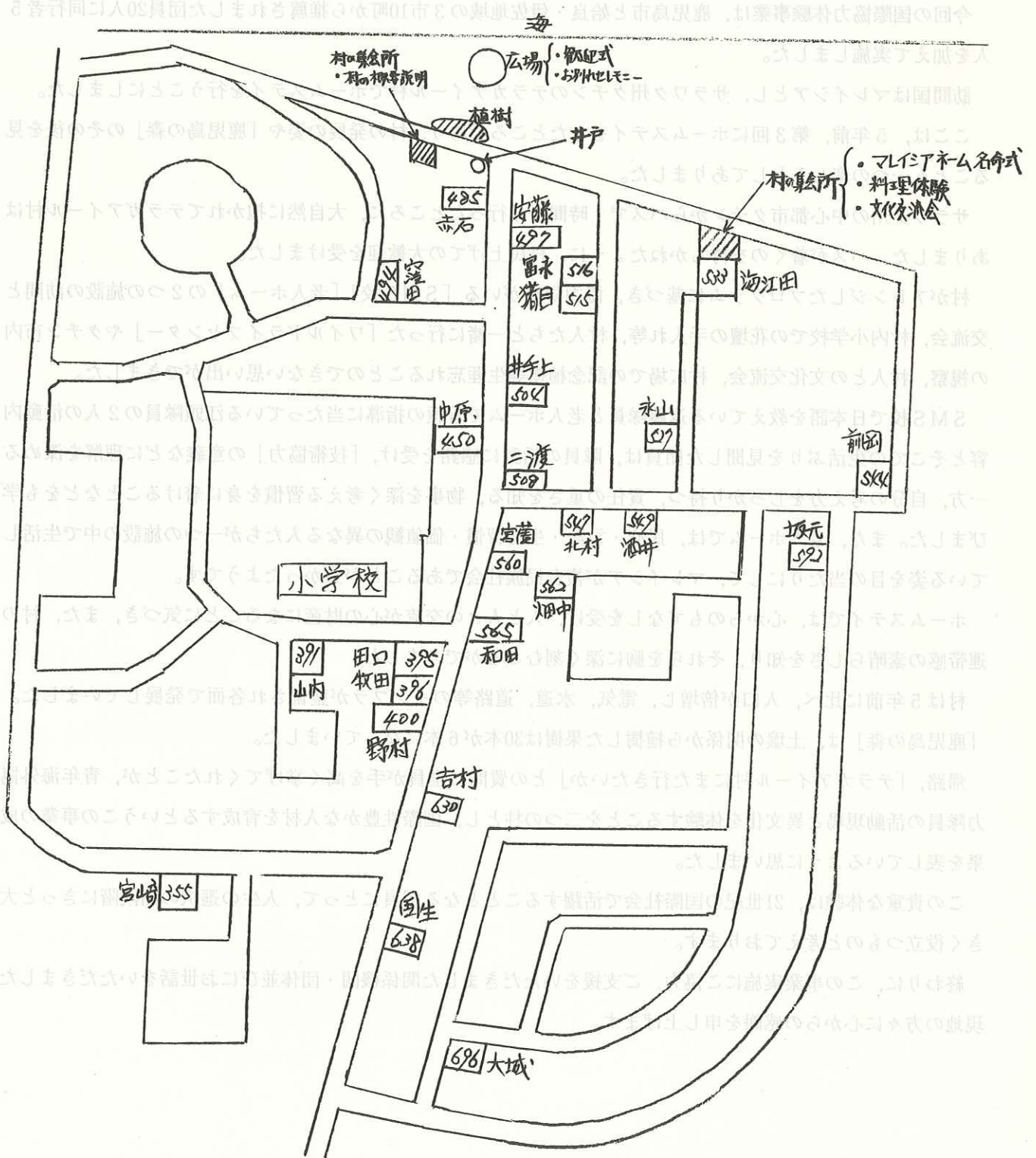
この貴重な体験は、21世紀の国際社会で活躍することとなる団員にとって、人生の選択の諸段階にきっと大きく役立つものと考えております。

終わりに、この事業実施にご協力、ご支援をいただきました関係機関・団体並びにお世話をいただきました現地の方々へ心からの感謝を申し上げます。

了系務き業専錫村代謝錫國

KAMPONG TELAGA AIR ホームステイ先

大 義 田 翁 長 園 園 問 請



ホームステイ組み合わせ表



JAWATANKUASA KESELAMATAN DAN KEMAJUAN
KAMPONG TELAGA AIR
JALAN MATANG 93050 KUCHING

Bil. Kita: 79/11/109/(25)

Ril. Tuan :

Tarikh 27/ 31 .7.1998.

BIL:	NAMA.	NO LOT.	NAMA A,A,	P:	L:
1.	PENG:MANLI SADAM:	560	NATSUMI MIYAZONO	P	
2.	AZAMAN BIN SUNI	544	KEILA MACOKA		L
3.	TEMEREN BIN ASRI,	396	IIIDEKI MAKITA		L
4.	SAMMAD BIN MADAHAN	527	NORINIDE NAGAYAMA		L
5.	BOLHASAN BIN LAMAT	696	TETSUYA OSHIRO		L
6.	BONARI BIN GANTI,	355	TAKESHI MIYAZAKI		L
7.	MESMAN BT SADAM.	516	KATSUHIRO TOMINAGA		L
8.	LATIFAR BT BUJANG,	496	YOSHITUGU KUBOTA		L
9.	MAJIDI BIN SEIMON.	504	NOAKI IDENE		L
10.	MENAN BT ISMAIL	630	KANA YOSHIMURA	P	
11.	DAWI BIN SELEK	450	MARI NAKAHARA	P	
12.	HASSAN BIN OTIF	547	YUKI KILAMURA	P	
13.	HASSIM BIN WEN	565	ARISA WADA	P	
14.	ROSNA BT MANLI	562	RUMI HATANAKA	P	
15.	HJ TEMPURONG B. SEMAN	592	YUKA SAKAMOTO	P	
16.	HENDON BT SUNALI	400	IKUYO NOMURA	P	
17.	ZALINA BT SADAM	638	AYUMI KOKUSHO	P	
18.	SULIMAN BIN WEN	515	KRORI INOME	P	
19.	BUJANG BIN WEN	497	YUMI ANDO	P	
20.	KIP BIN KIP	549	MARI SAKAI	P	
21.	MORAMAD BIN MORNI	508	KAZUE FUTAWATARI	P	
22.	ARMAD RIBUT BIN BUDIN	533	AYA KAIEDA	P	
23.	WAN ROSEN W CHEE	391	CHIKA YAMAUCHI	P	
24.	SELEK BIN BUJANG	485	NAOKO AKAISHI	P	
25.	RAMLI BIN BUJANG,	395	YUKO TAGUCHI	P	

SANJEEV K. BOLLA
SEHAUSAN JKKK
PPD TELAGA AIR
KUCHING.

テラガアイール村到着の様を伝える現地新聞

Nasional



Pelajar Jepun cuba hadrah

INGIN TAHU... seorang pelajar Jepun, Ari Wada, 15, (depan) cuba bermain hadrah sambil dibantu Mohd Faizal Kadir, 10, dengan diperhatikan Hideki Makita, 16 (di belakangnya).

Walaupun pertama kali melihat hadrah, pelajar dari Kagoshima, Jepun itu tidak melepaskan peluang untuk cuba memukul peralatan muzik masyarakat Melayu itu.

Kumpulan pelajar Jepun berusia antara 13 hingga 18 tahun itu berada di kampung berkenaan kerana mengikuti Program Keluarga Angkat 'Homestay' Belia Kagoshima Jepun mulai 27

hingga 31 Julai.

Sepanjang berada di situ mereka dijadikan anak angkat kepada penduduk di perkampungan Melayu itu. - Gambar oleh Ghazali Bujang



マレーシアを体験する

県青少年国際協力体験事業

鹿児島市と姪良・伊佐地区の中高生20名が、7月26日から8月2日までの8日間、県青少年国際協力体験事業実行委員会主催の「青少年国際協力体験事業」でマレーシアに派遣され、本町からは蒲生中3年の野村育代さんが参加しました。

この体験事業は、現地での青年海外協力隊員の活動現場の体験やホームステイを通じて、国際協力や国際交流に對

する理解を深めることを目的に行われています。今回の体験事業に参加した野村さんの体験報告を紹介いたします。
(敬称略)

蒲生中3年 野村育代



私は、マレーシアは初めて

蒲生町広報誌より

で、驚きの連続でした。ホストファミリーに初めて会ったとき、とても優しいパパとママに感激しました。

重い荷物を運んでくれたり、おいしい料理を作ってくれたり、とても親切にしてくれました。

また、10人の子どもたちもマンデイ（水浴び）の仕方を教えてくれたり、荷物のかたづけを手伝ってくれました。

3人家族の私にとって、大家族にはビックリしましたが、うらやましくも思いました。私たちがホームステイをしたテラガアイル村は、道を歩いていても、バスに乗っていても、子どもたちは、いつでも笑顔で手を振ってくれました。

私たちは滞在中、青年海外協力隊員の活動を見学するため、SMSKという中等学校を訪問しました。

SMSKでは、遠藤さんという隊員が、日本語教師として活動していて、私たちは日本語選択の生徒たちと交流しました。

私は、3人と友だちになりましたが、マレーシアの子ど

もたちは、私たちと同じくらいの年齢でも、小さくてすごく素直な子が多いという印象を受けました。

SMSKは、生徒たちが小学校のときにテストを受けて、そのなかの成績優秀者だけが集まる学校です。

生徒は寮に入らなければいけないということでしたが、一番、親に甘えたい時期なのにすごいと思いました。

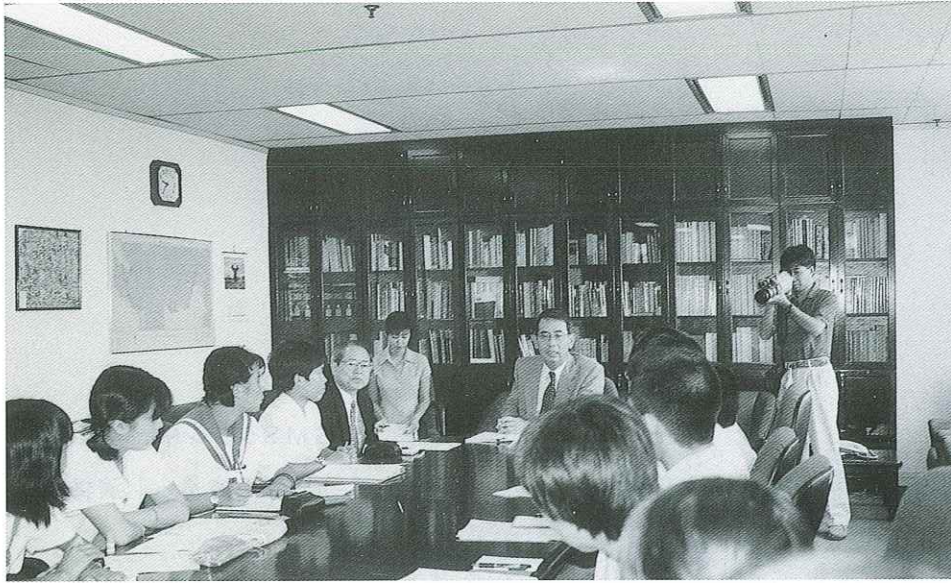
3人は、日本語も英語もすぐくうまくて、私たちの日本語も下手な英語も全部理解してくれて、私はとてもうれしかったです。

3人は、「日本語を勉強して、日本のいろいろなことを知りたい。」と、言っていました。

それを聞いて私は、まだまだ私自身、日本について勉強不足だと思いました。

私は、青年海外協力隊員の活動を見学して、自分の特技を生かした仕事ができるなんて、すばらしいことだと思います。

私も近い将来、自分の特技を生かした仕事をしたいと思います。



7/27

JICAマレーシア事務所訪問



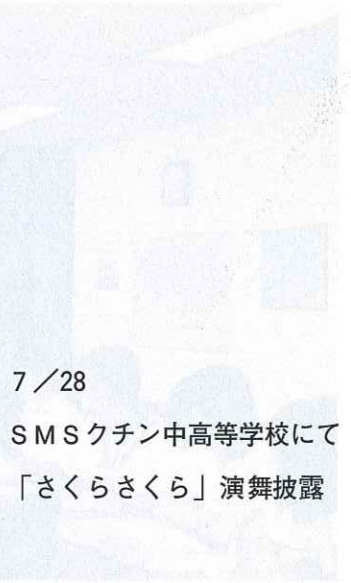
7/27

テラガアイール村の子供たち



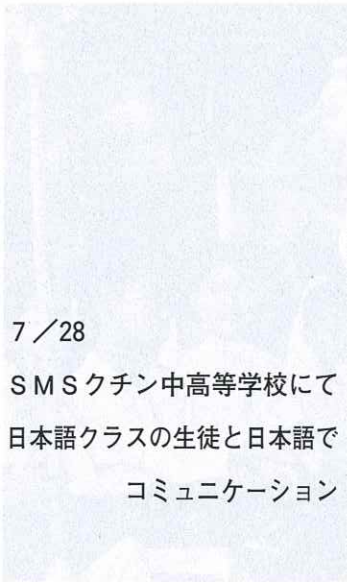
7/27

テラガアイール村歓迎式



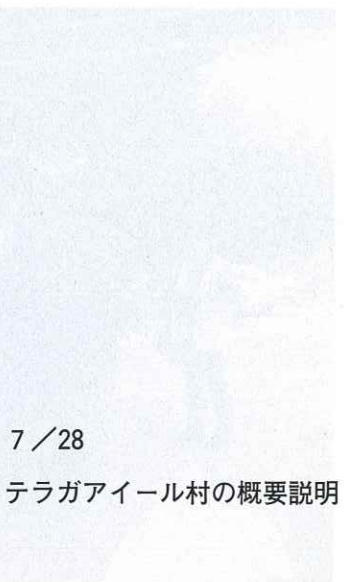
7/28

SMSクチン中高等学校にて
「さくらさくら」演舞披露



7/28

SMSクチン中高等学校にて
日本語クラスの生徒と日本語で
コミュニケーション



7/28

テラガアイール村の概要説明



7/29
文化交流会



7/30
サラワク州社会局老人ホーム



7/30
ワイルドライフセンター

7/29

マレーシア料理体験



7/29

テラガアイール村の小学校
にてボランティア活動



7/29

村の広場にて植樹

8 / 1

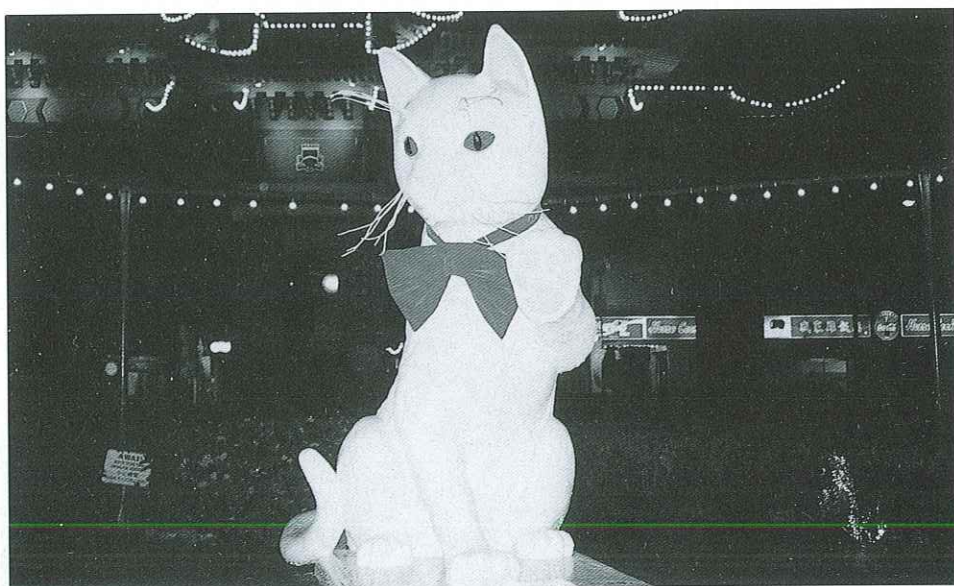
セントポール教会より

マラッカ海峡を臨む



テラガアイール村の“井戸”

クチン市内の中華街入口に
立つ“猫”（クチン）

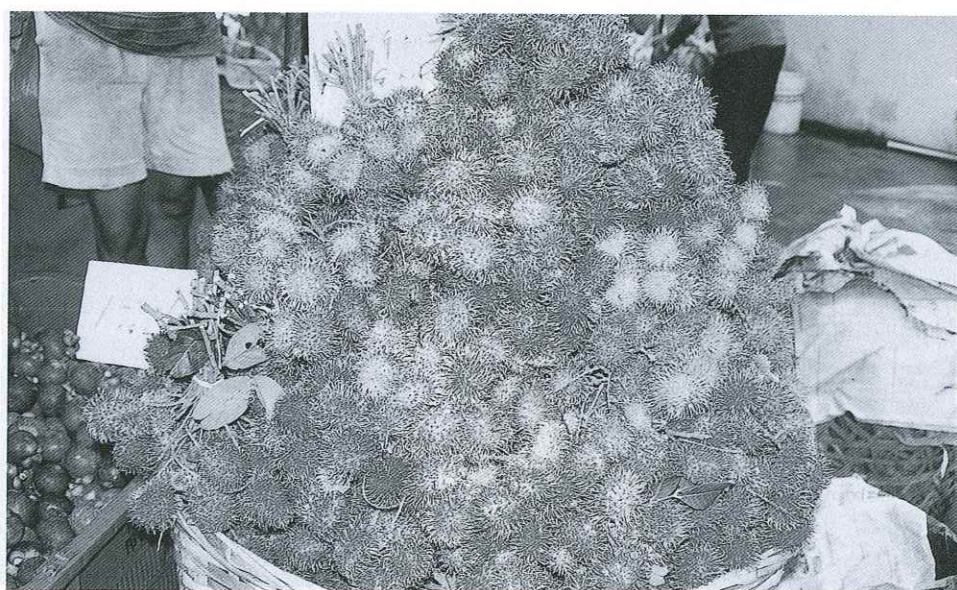




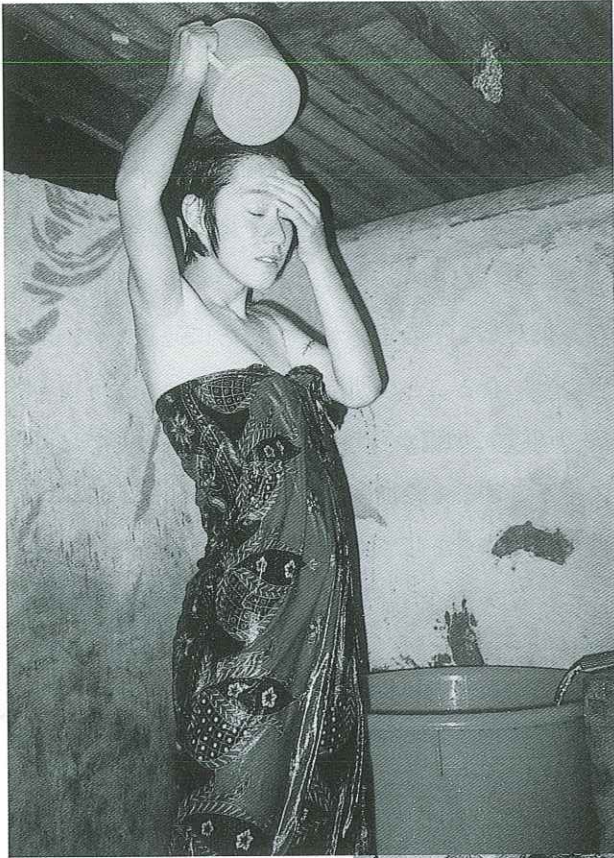
18
 じふ会館北一ホイグサ
 ドリアン (果物の王様)



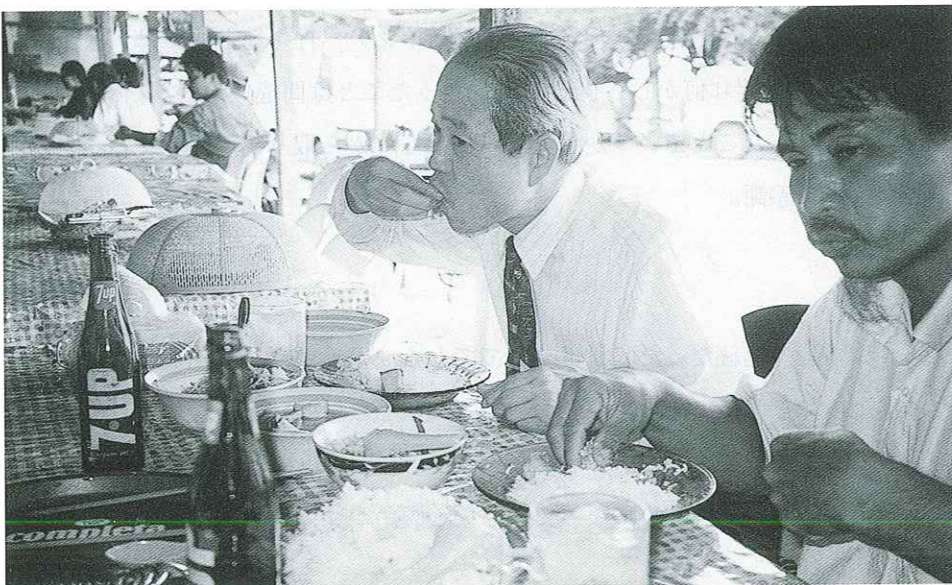
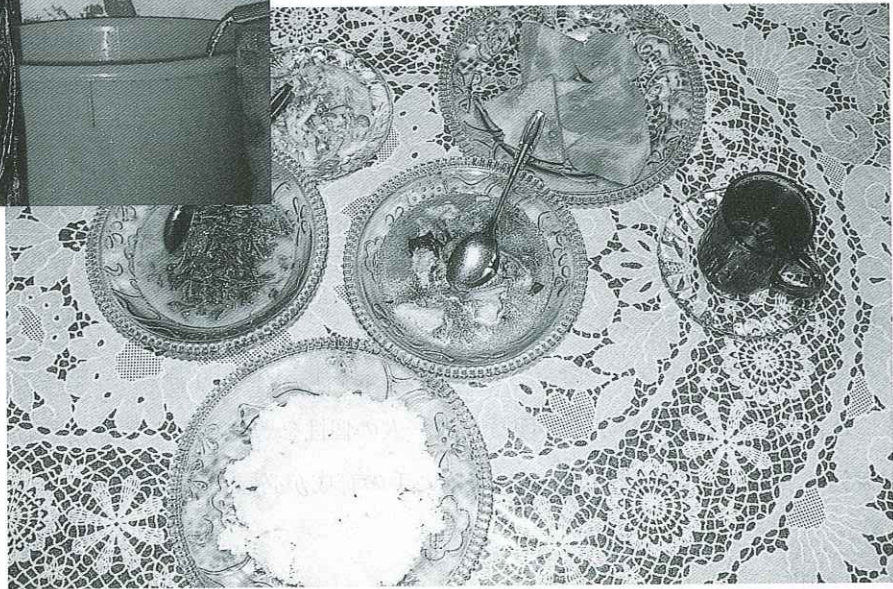
「名種ドリアンを食べた直後」



コロ人街華中心内市ぐモグ
 ランブータン (果物の女王)



マンディ（水浴び）



ライスに具をかけ右手で口へ

同行者一口メモ

【宮菌 夏美】

今回でこの事業参加は4回目。生徒数は今までの2倍になったせいか体調を崩す者が例年になく多かった。初めての海外旅行者も多く、期待と興奮があるなか異文化に触れることは並大抵のことではないのかもしれない。ホストファミリーが我が子の様に心配し看病してくれる姿に心打たれる。言葉が不自由な中、それでもできる範囲のことはしてあげようという優しさが伝わってきた。果たしてその思いが子供たちに通じていたかは分からないが、いつの日か辛かった経験が彼等双方の良い思い出になることを期待したい。いつも思うことですがこの事業にかかわれたことに感謝いたします。それからこの事業の準備から報告書作成まで残業して頑張った酒井さん、宮崎さん、生徒に親しまれ、村での踊りも躊躇することなく参加され団体行動を和やかにしてくださった窪田局長さん、本当にご苦労さまでした。陰で縁の下の力持ちをしてくださっていた弓場さん、青年海外協力隊OB会の皆さん本当にありがとうございました。マレーシア関係者を含めこの事業は多くの人の手を借りて成り立っているのだということを忘れずにいたいですね。

TERIMA KASIH.

【酒井 マリ】

海外旅行は、これまで気楽な一人旅ばかり。元気いっぱいの中高生たちに同行した今回の旅では、私自身も多くのことを学ぶことができたと思う。

国際協力について理解を深めてもらわなくては、また、異文化体験に戸惑う団員達に適切な指導、アドバイスをしなくてはと思いつつも、口をついて出るのは、「急いで」「静かに」ばかり。様々な文化の多様性を尊重することが大切だと教えながら、団員一人一人の個性を尊重することさえできない自分がもどかしく思えた。まずは自分も含めて、「地球市民教育」の担い手の育成が必要だと痛感した。

【宮崎 剛】

13歳から18歳の青少年20名。参加動機はいろいろ。「青年海外協力隊になりたい」「マレーシアの人と友達になりたい」「自分の進路を決める上で役立てたい」などさまざま。マレーシアへ行く前と後では、表情一つとっても大違い。参加動機は違っても、それぞれ何かしら得るものがあったことは間違いない。「体験は最良の師」である。みな自らの体験を通して学んだことをいつか自分の“引出し”から取り出し役立てることが大事である。多感な20名と同行できたことに感謝。

【大城 哲也】

今思うと、あんなにも楽しく、かつ緊張の連続だった取材は初めてでした。言葉がうまく伝わらない。歳の差がダブルスコア近くも離れた子供たち。そして、何よりも自分自身で克服しなければならない毎日の生活。優しいホストファミリーに見守られながらも、「やっとのことで乗り切った」というのが率直な気持ちです。この夏の経験が、きみたちの将来にとって意義あるものになってほしいと願いつつ、再会できる日を楽しみにしています。

Bagus! Kg Telaga Air

第7回 鹿児島県青少年国際協力体験事業報告書

編集発行 鹿児島県青少年国際協力体験事業実行委員会

平成10年10月20日発行
